



特別
~5
6272
4





寶珍文庫

渡邊千秋藏

渡邊千秋
精觀

たのむ

下ろす

たのむ

傳道釋教

きかいたの道

たのむ、一、言、意、言、とつとあはれりて、
さし、ま、ぬ、り、し、よ、ま、く、一、度、せ、自、身、の、り、理、
と、た、い、と、し、つ、ら、ま、せ、の、り、り、て、も、心、と、持、
た、ぬ、る、体、志、と、一、一、義、と、と、り、木、は、実、

アキ

横山家藏

とひろふ難者どへてもはのるはのあひ
さつ成あけきぬつこへ慶成けくやま
とあひあふけいよくだうーしりれえ
いよしくうしくあふーけまてまいこわ
うくあのかとのほたきくともうさ
かうけうは里らう一そ思誰さあ

みまむ
いそくの山海地景四まの平木
こ世を為世風 雲 霧 雨

あま雪温熱冷室目の上弦下弦折時き
よたうりひまみけあ社の途まき即妙こ

む
一

同体むとあふあふのあか福下たくみ
かうさるハおもーろくひは月ひの
連類さくの教む又今のの教むハ
教む工ま思 案とめくくしたま体ま
へーまうーうんまはああひ

一頃乃る
さまははのる沈思ーして
あませぬ物や大らうあへ

のうぬ向さうはうろくまへーま
て人よ待か終らさてハ幸興千あや再々
まおさし

世の如く
うねる新あつりに
不出すも世を
わくぬやうふあふ

曾の考
いを取持まひくる
すくへ余は

き情のれさ
き情のれさ
き情のれさ

心
二

さすもすく
さすもすく
さすもすく

神
か
か

鳥
か
か

さしここえり。ソノ類又君よりつうへて
さしこは体見が人々中平よりつとも不似合
たらしむたがとハゆうよやばくは同体
とのさまよへし

老後能く又知がなる時が持
の掃よきし一是せい

のつきたるおやあまをめぐりしは
たくまきり。老るよふに命とちんく
を洲よあちま換わしをて載こいほの君
よそりすよのまはせをまへし

む田

はるはるしきたるもあしありし
おのこころへし

時をよかくしんし

まはるのまかひの
はだちみきりし

しんし相ふの梅がほつたる
あまをめぐりしは
さしこも時うかりえや
あしを撃えつせのあし
あしを撃えつせのあし
あしを撃えつせのあし

おたつらするよるの雨は山時亭乃一こ急
と待まひてさけみおろしけり一階おと一
さると一して涼一さ成は致くあふ衆もとき
あへも萩のこえうよめさ日くわ男席をく
ゆもへおししき月およもおる昔の秋成
思ひつて魚乃言をりけりくふきりて午鐘
おをもうけろにえてお衆もや一杖。すき
きく時雨一此の雲路衆とかりり山時記
極くふれをともおよむきしゆえあか！夜
おの月お涼く一すあれとくけつまれい

山時 記

介山ハおきききよの雲ゆく幸あみけり人
らぬ日りさる髪とおとろきいりへとも
こふる心のみたれうは光源氏在中一なる
とのをよぬおもひりてあをりけりあうぬ
おしりうくれおちろ月おろすとひあち
きえておんむけりけりきききききききき
の藤乃うり衣目もゆき一かこのうまくと
里浦の文もさるぬ和路の彼はたくとけ志
おちりへさる山の下道おくると堅原のま
おきききききききききききききききき
いたみ

あいにぬるとさきはらふらふらとくに
あや子はさしおのむに思ひたつと
らんらんありの音おむしる。おまひを
のへあさの葉竹のやしくりしと
まよわしての天はしめまゝと上人のま
すくへ仏神のまもつとさしうのしくお
のてつらあまのたへしたくまののほり
よてさあしあいのたはのあはぬま
のたの体不出才あは口よりいかにさつけ
たのたのまは表は風俗祝のりさものあ

新古今

古今集

新古今集拾遺百人一首
さとしきよははるる

武家歌

さとしきよははるる
字をけまぬにみあた

さとしきよははるる
大和歌をよし
為替のよ

いんぎん
武家の歌
おまひのあは

志うへうはる初也

難波渡可

市野の渡里さるつれ
つまむたるよむか

いふるまを難波風いりか風さるといつた
は兼侍りまき極め者野風さるとはくけ
こゝんいまくもおらーくけらるる代の
恥辱さるへしめけいりれはる初さるか
れさるにさつち侍らんハ代と乃撫を兼執
人の古風は度ぬらむくのまろーあうれ
は者よは鴻天は天神之神慮もおうろー

うと花けく

とを初定ま
お嫌ひつる初

まう侍れとも家内への執りおのうとをさ
くくのちくと難目いけよよとけつせの
山とよみおよびあう人定家内子例の侍嫌
のうとをさくういふとまきハ是と
あしといちんハ定家うさんだるへしと
だしとこうかめたすひけとつわおん
まういことえとりまともよまの初め
うん人のたくるまよまおよめ

同書三事

彼令室の風

さしふみこも
峯の庵のもの

うきささしの類

風もさすやぬ春のけし

—
—

とまらぬあまのこころに
あはれおこさぬはるの
あなただけのあまのこころに
あなただけのあまのこころに

花とたなを

さしに梅とあけと
あけとあけとあけと

—
—

花

あけとあけとあけとあけと
あけとあけとあけとあけと

—
—

花のけし

あけとあけとあけとあけと
あけとあけとあけとあけと

花

あけとあけとあけとあけと
あけとあけとあけとあけと

なまはら ちの けの け さい けい せん せん
みさ けい せん せん

い けい せん せん せん せん せん せん
い けい せん せん せん せん せん せん

体同奉也

らみ せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

お母さん

せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

せん せん せん せん せん せん
せん せん せん せん せん せん

おとくろの娘をいふ

おとくろ

おとくろの類をいふやの娘をいふ
おとくろはむらやうさち

うらみーおいらは

妹ふけぬ

子のぬはあふいハと
たんぬさち

妹はあう妹は行く

おとくろの娘をいふ
おとくろの娘をいふ
おとくろの娘をいふ
おとくろの娘をいふ
おとくろの娘をいふ
おとくろの娘をいふ

いんまー ーいんまー

いんまーいんまー
いんまーいんまー
のあ

いんまーいんまー

いんまーいんまー

いんまーいんまー

いんまーいんまー

いんまーいんまー

いんまーいんまー

いんまーいんまー
いんまーいんまー

いんまーいんまー
いんまーいんまー

いんまーいんまー

いんまーいんまー

五月五日の松風と
能く

花のひも柳いらみまは

るは風

は二の体むつりーる物と女子ゆきり
とさうまたく人ハよるにさうもき益をり

五月十日

ものほりりもききみえり
りまはるるりーるはくハるるるるるる
もーヤんるるるるるるるるるるるる
後井やまのりーるるるるるるるるる
もむとーりーもきき木の文よよもあてあ
まへま初いさるうとらけてむことまはち

二十
る教へ奉

春向秋意
以上子のほくくーるる秋の
るるるるるるるるるるるるるるるる

へし意のむにこむよるむよるむいたるへし
一むよてむつへしむ

夏冬冬時神祇釋教以上

述懐く葛山々書書
在け由と
ハ述懐と

四々書以上合て三句とへしけ三日お
也とまこころや一むよこむるしこころす
乃部ハ各別さり連歌ハ書書

懐旧おもひよりさり

山類々追居に亦亦
以上
体用

の美おありな冬とりあしるむおにとりあ
ふまてむ教のるし一むさあとも二句三句
よてさあともはくへし

人信信こむハ不若三句ハはくへしこむ
かりありこむ人信ハ二むささり

殖物物こむつこむへし算と木とかハ
はせ三句つこむへしかきり字紙字長

牡丹の湯の山さうの三吟を極む三句あり
さるすへきやうあるおそきさくまといえ
くも然に 膝抱えはるるへうし丸慮子
いりやまうしーめけるさきまき文通の
まよりくおくものや

牛 かえりてと二句よやかハけり
お と替りたるは生れのあること
ま や

本三のぬ様こ

本三のう三句よきこへうしお説お
物日こひゆけ款あはるしかきけとは
こころハ

月よこころやひか行ゆえんとき
るよあーあまもちうめれ駒乃秋の歌と
けて又きよまうにぬ邊極の山とりやハ
あハあふ極乃園のほろあまかけまて今
や川らんもち月の駒後ハお極升園の
いえうとふまきし山まうしおきまら
の駒とりやあまうし付るや又都とまら

みらねと付て三つめいけさ何ら
うすあみらねくふのみやこいあり
り々々方言人のうりいぬハ 後ハ
歌出つ々ふみりねさういけさかハ何
ゆむしころとみせ

本音の讀法 志まつとある用やちと
よ中十代也今あると詞や又を代み人の音
さハ本音の用へういを代のなまはさ
せる 讀音うは用へし 堀河院首度百首出
きあつハ 縦難の 近代 集ある本音例は

人のあま福く不本音とハ付合る不の好用
やは本音の川用 讀音やと多ハとあるの
詞や本音の例とは音 の本音の用はれい
のことも 連歌も用らとや又原は物類
ハ大甲のおさわハさうまへし 此ハ不ハ
二つりうとと人衆やと 多くは後 音光
用は読まぬは読とと今あると初や
此二条は本門乃読るう人つて音の 時ハ
音とあつて三つ用ら歌を代の 午の音
よめい又やうらうらと 音の 後さうと

乃ふたぬとりのきとすりし筆と又えらうり
てうらしてきこりおておれ懐紙とひらけて
中二枚と又二枚おて大畧を覗かふた
のて筆さとのきハ又とこのよりきわ
いつれよういろのうい物りかす大ぬに
ふ置へし又筆の下よるきり悪し
はせえまを敷さるはええかられよまに
とくへし又こころ懐紙をひとも覗か
ふたううおけきりどくへし下給さ

むすしめ

さるる懐紙ハ大く四角のと書るやうに
ハ中二枚よりとてひまに給のある筆
よる四角の紙に書きてまへしは書目
の敷るるまにひまに書き乃給のあ
る筆よりとてまにひまに書き乃給
て紙とひまに書きてまにひまに書
はる敷る給る筆に書き乃給のあ
かすとうおけきりどくへし下給
後申さるへしとてまにひまに書
て紙とひまに書きてまにひまに書

後申おほる三度や人乃いたるると小經又
久号ホの連歌并時に紙の字さしし種又
連歌又号と連歌ととくり々へし論歌の
又さしは要又と連歌と書るへし寺社并借
書出進書おさめとも種又久号さるとして
さしハ書のとくしはくりりりりさるる
并連歌に久般の紙おさして懐不事るうへ
其の上とくや一歌とと出書たしハ
そ一歌と置や懐不事とおさしてハ己あ
る

何一懐不事と新て久其まると書さす小
つり一歌とやうさ中ぬて苗のまるとひら
きて執事久般の紙おさして又やうて書
て久其まると下るまらると紙字さし
書出進乃連歌と書るて久般の紙おさして
下る其れ字書るへしと今ハ其の字さ
しは種やかた後申志て紙のち出書たし
ハ書并れとく種ぬて書るへし久般の紙
書出進并れと書出進一紙のち出書たし

あつへし
四、指合と能くんうへ守成度掃ますへし
五、雪月をのありにとらむるへし
六、宗通を人おれ兼又るまひらふへし
七、後身被るかと洞子座あるの爲お應
ひに傍身あるまぬおたしあむへし
わハ子事三經とくろりまかげ懸念と
きとしへし
十八は夜取儀終日みたまへし

む 百四十一

は縁と能くわらへし菓子をふへし縁
のむへしひのりふへし連歌と
へかひらうんハのとりよむへし
らんまへかき書信尊ある人乃白指合
とてそとへむまへし書とて後
宗通のむいようくたなる風情より被る
まのハにさるてらあはるあまき人
おんおむいもまとおりあてはあれたと
すらしむるあまらあまらあまら

うりともぬきいばや國のしむらとびく又
きよきおきまきまきとあくらん時れりる
とぬきる人のいたけん時に指合さまた
こしすえぬらさあさうきぬてらとさうく
ぬきへーろお中ーろきあぬものや又時
ぬきぬきまゆのぬきまゆりけあろろーあ
まゆたくはしんまゆきん乃白いゆーあは
あははやあーあまーりゆきろくさあとも
ぬきすくー時まゆぬきゆーあひとろ

卷三十四

卷三十四

うりともぬきいばや國のしむらとびく又
きよきおきまきまきとあくらん時れりる
とぬきる人のいたけん時に指合さまた
こしすえぬらさあさうきぬてらとさうく
ぬきへーろお中ーろきあぬものや又時
ぬきぬきまゆのぬきまゆりけあろろーあ
まゆたくはしんまゆきん乃白いゆーあは
あははやあーあまーりゆきろくさあとも
ぬきすくー時まゆぬきゆーあひとろ

俊夫くゝるる白狐ふしあしの中やまの
 寺用子や申座の執事子事敷は持茶門
 歸高きと出出座するは上座へむらひて
 是へ一又午の執事子各子のさ又さ
 さああささささささささささささ
 又いけ々執事子十種は用とさ
 五位取道 善人位過 在上為自
 也致為嫁 弟結弟一 不耕足緑
 多剛在物 寺友又魁 必通神慮

廿四二十日

自の佛性 修文所むれとままあへと
 の所々能と事とさるるあるに決り子さ
 甲一藝さて弟結子いささき幾老もほ俗
 をえさハはさ道と事とと中又さささ
 つゆささともわさける子の法法にむさ
 く人妻乃生をけくさいたけく小和國に
 ちわびくくもものさり

廿三 一 座は度と事

みまむる

一を真の川の子殿はく世を
あのみ草木葉山葉のたつ

らに時きや風葉をさく目あのはさ興あ
ものや敷の編才三のはさうむはのーま
あさるあよ果茂え三すはよ是と入

編る

ハ敷の編理りころおやうよ山
まは山あまをさくはあ存あ也

此跡はさあはあゆ時と

弟三

ハ敷の編乃のと轉一をま柳
み枝とかりのとくとも経ハ各

別よまして下り二木をよおよみれた
やううーまへーもさーさあ留さるも

あや草人ハ母自然

おおあな

あよこをさ
敷のよすハ

あはとさうわあおあうのさう好てつ
あはまうらんハ益

なとけ神

あらしんハ
新敷神祇あさりよ

式は五のさうま

釋教

と述懐とむとていへるる釈教の

述懐

く萬々々々

合て三

のいへーはこもへい述懐中三はくけて
いへるまのと三儀也述懐とこいーてや
き乃のいへるれハ合て三とソよん

本懐く何々々々

おのり何ととも五の嫌や大すい何の成故や

本

懐よき事付て又述懐のいふを
懐旧も何と志れやあま目控り

意

と述懐と預ひるる白意のいりし
よるさるへー他流もよえさあす

たさきりたうのともおこふ述懐不の
さともある人の傳へられまれとにま
はちけりまかゝ執事のとらむへ義
あつた

申すのら

もも本懐の初めたら
本懐のいなりとよ

増経のうへに乃志にけりまうりるいたくは
らんけりまぬへまうりあひひ

ふみぶのねきり
目きへ

うきうきひ終に月ハセのあうし

雲おれ一頃
もの一羽毒多れこと
く又かろくことなかく

あけり

終なるしるまへハあけ
るまめともはくさへ

衣傷めあへるものおちと終まめ
いふれあけくさめさうたきりまはた
とひあけくさめさうたきりまはた
あひをい終ることしもあひまめし
めと不出のむきへ

井田
あけり

そきあひまめさうたきりまはた
あひまめさうたきりまはた

寄物終ホの初とおもひけけし藤田介の書
籍の儀のちるしとひるまのむね被更し
又夫志すま自より衣書とかたけけくろひ
出立えへし一ちりハあ押ともそりあ
券の藤ちりとも不似合ろけ住るし早書
さると更らるし一ろけかといくとああして
人お目るたけぬやうゆいてさうへし終日
のり儀おもむきのこと一けれハ右人乃書
ともけけし一ちり藤の藤のおまぬやうふ

たしるむへしととくわ言難藤を吟お座中
市ハり志る藤の藤の難儀うわき人見さ
とと回書と出しぬしへうすす藤藤
自他ともふいとらつか寸致やあをひ大
けけ藤敷をさまくらうらむとこりたか
よあして人の藤るこらしていとこうこま
るう又ひるま出して藤藤よこれくと
ハれくち又藤藤おもむきとらるる藤
けむれあこ里の人まてもあま藤藤えはる

ことさらうめちとるわてゆえのしき
用換えへし以上狼藉至極也此道ハ思ひ
ても多のまよふようといひ千里行かろしめ
くくすといふともあつ精進志つらだるこ
とささるわい人の目へみくみく地
お侍らりくおもいふまじらあへし人
の白と黒の時ありあはやくこしとや
世へくともおちしあはやくこしとや
きこくふら世はさすまのをしおし

千七百一十

あゝあゝいふはみおまよするまよ
ゆるわのち福らとてサトみ付さしめ
はくちさしとえさるは待とこるは金と
あゝうこさるいふはあゝまものさあ
守るまよとて金とさしといふくへくは
礼とあまの懸念するははりちとさる
よこさるまよいふは待今向さるは礼儀
あゝいふはみおまよするまよ
くくくまよいふは待今向さるは礼儀

多分のるしやむをよらふなる物事なほ
て侍よすといえきやわいのしほ事な
るへし志あは人のむよめしてさる
ことし秀逸出まらちあすへらり
まかむる人の付さくんあいな敷成し
くし喜あらる成者とあはくすきあ
口成用へし来座として香月を成好ま
又いきたたまふかこくさくしあうろ
ま相三はぬはむる事なすりあから
し

巻之三十一

二五十一

これ初稽紙中初まるともな座なり
あまうはも初心付初はくし物たり連歌と
てさしはちさあらしるの通とひい
るさふへ来よあし初あきの道あ
かしぬやうむいりるさあはきの胸
やりささたる初成りあはれし
もいろく侍りたりしとふ連歌乃こ
さしめし一首中もあ座あらん時
さしめしらさくあはれしとあ
さしめしらさくあはれしとあ

興あおまのや又は〜
 さいのやうなまのむねも〜
 まうり例のえも乃よま〜
 志き物る甲何も付て〜
 たりまるとほ〜
 よううへちるおも重〜
 かいほのよよ〜
 大色〜人〜難むさ〜
 るおまは〜

新編十一

中よおまの〜
 さいのやうなまの〜
 まうり例のえも乃よま〜
 志き物る甲何も付て〜
 たりまるとほ〜
 よううへちるおも重〜
 かいほのよよ〜
 大色〜人〜難むさ〜
 るおまは〜

報竹いゑ

生枝しん不嫌ふけん以竹いの字の

重衣しんの首くび

重衣しんの首くびは乱らん志しの乱らん也なり

~~~~~

鳥衣とりの襟えり

鳥衣とりの襟えりは一ひと切き衣い類るいなり

鳥衣とりの襟えり

鳥衣とりの襟えりは鳥とり衣い類るいなり

~~~~~

如前目

鯨くじらの待まち

鯨くじらの待まちは論ろん也なり

~~~~~

我鬼われの類るい

我鬼われの類るいは連類れんるい三新式目也

洞麻どう玉たま章しょう年ねん免めん物もの

洞麻どう玉たま章しょう年ねん免めん物ものは其そのの類るい也

~~~~~

春風松風 おこさる別表月夜ハ不夜

葉紫 と 柳 替わりの目と葉紫ハ

坂谷鳩遊海江

堤渚磯沼

三与物 の替り

み葉 文乃 類 め新式目

宮 皇女小一神祇一又皇女神祇のあゝ
とあるニとあやとあゝふらふらふらよ
以上三巻

甲白お の替り

花 蝶 玉 花 くしのかの樹木の
のこしーの

ふみあはほく

五句物

一、小替子
~~~~~

世梅

五句

新正

歳乃首月也

歳手

歳手のまみやくしりたる体也

黄文律

黄帝律と云ハ

貞女茶

~~~~~

紫

紫の事也

暖芳

ものゝあも

~~~~~

踏ま白

~~~~~

~~~~~

~~~~~

鳩

鶺鴒の鳩

鶺鴒

鶺鴒の類

蜂

夏

新緑

新緑の

霧

霧の

黄梅

梅の

黄

黄の

白雨

おれ

秋

秋の

乃

乃

乃

乃

蜂部

初涼

初涼のころ

子の暑

初秋のころ

金時

秋の金時

爽

秋の涼

懸袴

衣乃事

扇

扇と置

葛の枝

結や

黄柳

秋の柳

朝露

夕露

朝の月

夕の月

冬部

凍柳

冬の柳

凍葉

冬の葉

枯

草木の枯

探梅

梅の探

春信

春の信

歳

歳

爆竹

爆竹驚見るといふ

備文

おろちやうう声るといふ

山類

雪山

天生大雪山ハ雪山類は雪の降
たふ山ハ白瑞山類也

岫

山類と

峯

山おや峯と
ハ岫山お

追

湖鏡

只湖み

鏡

曲さ

一糸

糸

糸

糸

等

海

硯

也

類

釋教

禪

禪多

定の定

錫

錫杖

經

僧

祖師の名

本懐

文利

文と思ふ事と
重なる也

芝

世の言也

浮路

衰

白の老

物名

履

巡

退

陸葉

惠部

錦字結

私種

園怨

清漢

時結

付心

美人

子守

以上は
以上は
以上は

簞着

古

古枕

粧鏡

四ヶ条
すまじり
鏡子

通

照得人

楊貴妃

りけ
あ

すまじり
すまじり
すまじり

すまじり

務部

信
あはれ

字

北
北
北

き

心

一
一
一

漂泊

あはれ

女

あはれ

海

あはれ

或人信

公侯伯子男

以上是子也
乃侯也

士

以上人信也人乃之も人信也

帝王

祖師之松石

舟者

舟は上人信。あり

教又本

教

信

舟の類人信。あり

生殖

梅曆

梅畧

梅西

其西也酒朝也酒

花ハナ心ココロ ハナ ハナ ハナ

鶴ツル林ハヤシ 拾シロ枯カ 皮クダ木キ

藤フジ杖ヅ 刺サシ花ハナ サシ サシ

刺サシ心ココロ 刺サシ心ココロ サシ サシ

茶チャ 念ネン ネン 木キ キ キ キ

北キタ夜ヤ 念ネン 類ルイ

被フキ 暗カクレ 春ハル 女メ 家カ

胡コ蝶テフ 着キ

付ツキ 白シロ 可カ 輝ヒカ 物モノ

玉タマ 膏コウ 平ヘイ 洞ドウ 湯ユ 古コ 海ウミ

子 おし類
あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

い い
お お
あ あ
あ あ
あ あ

あ あ
あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

あ あ
他

あ あ
あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

あ あ

あ あ
あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

あ

あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

あ あ
あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

あ

あ あ
あ あ
あ あ
あ あ
あ あ

草くさ 草くさ 然しか 然しか 何なにのもの也なり

衣い 衣い 同時どうじ 同時どうじ

同时どうじ 同どう 同どう

又また 以もつ 以もつ

立た 立た 物もの

如ごと 如ごと 如ごと 如ごと

同どう字じ 神かみ 祇みこと 釋しやく 教きやく

本ほん 懐くわい 意い 務む 月げつ

松しょう 船ふね ふねの連音の字七の物と云ふ

七しち 七しち 物もの

同どう 同どう め連音の同

回白教三子

春物連年の夏冬果意果

神能 教 教 穂 刈

本穂 山類 名 追

居心 教 命 生 殖

如 田 田 十 十

牛類 降物 牛 物

人信 衣教以上連教のこ

國名 名に 人名名之類 二白種也

中白之内禁集物め連

ふ 祥字 人名亦於類

いふ下巻去天の七年とてことを
あきらむるも其記と同一なるを以て
これに著書と紙色は眼の枯れ見文
かゝるを以て此文を以て再と授命を以
煩言をそつう用後詞をそつうよ
まゝいあましく風雅の本合はる夜の思ふ
あゝと海ふらふと十有余年を暮る思の

本
目
録

と云ふと云ふは後已老し書と者も家
を引く事なり一尊とありのり
所をいふをこそよひ懸座とあり
其中書を又修以故指宛ある事
教返す時傍人籍よと云ふは自ら
信有と云ふは縁うくは又縁未決の
舊分と云ふは慶長改作此新書と

用ふと云ふは今年四月と漸く
法書一と云ふにわらふといふゆゑ
他見と云ふ事ふれば擇むに入らば
其理智公に人儒道も赴ていそ
徳行をとりけしと云ふは忠といふ
親師もは孝といふと云ふは
宰相の事直後統御の事あり

時日長らふらんあはれ海一春の花を
吹ちぬ穢の葉に折るそよ風の
又ふれう海いそぎまゝおくうし
浪の雪大なるうくしきい遠次おし
顛沛もし高会成けしぬありうら
わ平しをうらさきいぬ一帯いし
ま心元仲冬上の昔にやとせく

いよ入梅菜波水の切一十三年
寺社修造い十一そ高野位との
星霜相共五天齡すそゆふとこれ
桑橋よかううく泰しくはらんんん
高祖入定の歴教ふあうわらたせの
い一層をしあーそく一息のほろん
夕とまんのまをり生滅感重初志

しつり 樂極悲生此のハ一瞬
いふありしけ一冊廿箇年以前
神話や梅のまほよらひいそ
あられしりこれぞんせうとよ
雲もなふしけしそんそん
々又法書轉曲のありき氣ふ人
下葉ハ流のりくとうかといふる夢想

ありき又ふたつりそんそん
事と浮橋のありきとらり
わのこせのまよんつひと書
と新書せん時つらぬき一具
ひのこせの一念のありきとら
勸善控悪の作らぬとら
洛陽ふハ大佛殿奥院樹下あり

慶長二年正月廿一日書く申上の
此の書はしつていふにけられ
有為れより書くをくらんとて
三葉公はしつていふをもちり
無原寺はしつていふにけられ
信はしつていふにけられ

此の書はしつていふにけられ

此の書はしつていふにけられ
無原寺はしつていふにけられ
信はしつていふにけられ
有為れより書くをくらんとて
三葉公はしつていふをもちり
無原寺はしつていふにけられ
信はしつていふにけられ

此無言抄之作意者兩奧書
在之不通被成 穀賢人御
感不斜在寫苗之位 勅是後
筆志也

慶長三年

二品親直空性

此身之世之如題
未之得
勅也乃大之寺殿
一團之世之
心之入之世之
世之世之世之
也

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink and is arranged in several lines across the page. The script is highly stylized and difficult to decipher without a key.

アサキ

横山家蔵

